

藤野町山岳協会ニュース

平成30年4月号

発行日 平成30年 4月16日
 発行者 藤野山岳協会 杉本憲昭
 事務局 緑区小淵1545-1
 北丹沢山岳センター内
 TEL042-687-4011FAX042-687-3980

地元観光協会の「藤野15名山」歓迎します

藤野15名山の命名は今から26年前の平成4年に藤野町山岳協会・藤野山岳会が広く町民に呼びかけつくられたものです。このたび藤野観光協会が新しい観点から15名山を発表され、わたくしたちは満足し歓迎します。

藤野町山岳協会会長 杉本 憲昭

藤野 15 名山

Mountains of
Fujino Best 15

藤野は幾重にも重なる山ひだがつくる美しい山並みに囲まれた地区です。そして数多くの峠や、歴史と伝承を秘めた山々は四季折々に装いを替える樹木たちによって、こころ癒やされる風景を描き、多くの人々が訪れています。

北部には三国山、生藤山。その隣には藤野地区の最高峰の茅丸がそびえています。甲州街道の裏街道として利用されてきた和田峠、展望が素晴らしい陣馬山は四季をとおして訪れる人が多い山です。明王峠、矢ノ音へのハイキングコースがその先に連なります。

藤野地区の中央あたりにも素晴らしい山並みが連なります。藤野駅のすぐ北にあるのが小淵山、岩戸山、鷹取山。駅の南には葛原の平地の先に京塚山(石山)、[名倉]金剛山。東には火伏せの神を祭った[日連]金剛山、烽火台のあつた鉢岡山などの山々。南へ下ると、相模湖に美しい山姿を映すのが石老山。均整のとれた山が石砂山。二つの山に挟まれた牧馬峠。

もう一つの南には、山頂に火伏せの神などが祀られている峰山。牧馬峠を悲しみの中に越えた雛鶴姫は、この山を通過して秋山村へ落ちのびたと伝えられています。

緩やかな山並みと湖が生み出す静かな山々の風景をお楽しみください。

藤野15名山登山記念 オリジナル缶バッジプレゼントのお知らせ

藤野15名山すべてに登った方に、オリジナル缶バッジをプレゼントいたします。

応募の要領は以下の通りです。

- ①15名山に登った際に、頂上に設置してある標柱とご自分の写真をお撮り下さい。
- ②「藤野15名山スタンプラリーカード」を藤野観光案内所「ふじのね」(JR中央線藤野駅改札出て右手)でお受け取り下さい。
- ③15名山に登った後、随時カードと写真を「ふじのね」にお持ちください。スタッフが確認し、当該山名のところにスタンプを押します。
- ④15名山すべてのスタンプが押されましたら、「ふじのね」にご提示ください。オリジナル缶バッジをプレゼントいたします。
- ⑤「藤野15名山スタンプラリーカード」に有効期限はありませんが、缶バッジの配布は先着順とさせていただきます。



これが
標柱です

藤野地域観光振興推進協議会
 (事務局：一般社団法人藤野観光協会)
 電話 042-684-9503

国道20号線クリーンキャンペーン活動 新緑の4月8日(日)に16名参加

今回のクリーン活動は吉野花だまりを中心に西側のレストラン「てんすい」前、東側は旧藤野側と相模湖側のトンネル手前までのゴミ等を拾いました。特に今回は花だまりの路上にびっしりと青苔が生えていて不衛生だった為、業務用掃除機できれいに清掃しました。集められたゴミは450のゴミ袋に20袋分35キロで弁当や飲料の空容器等がほとんどでした。集積されたゴミは4月9日(月)国交省相武国道事務所で収集していただきました。ご苦労様でした。参加者は藤野山岳会と北丹沢山岳センター等の会員の方々でした。次回は6月17日(日)に実施いたします。

(主催：藤野町山岳協会・藤野山岳会)



列島をあるく

■アートで街づくり

「芸術村」今も若手の息吹

相模原・旧藤野に根づき30年

神奈川県北西部の旧藤野町(相模原市緑区)は、第2次世界大戦中に画家の藤田嗣治らが疎開したことで知られる。この地域にいま、若いアーティストが次々と移住している。30年ほど前に掲げた「ふじのね芸術村」。合併で町は消えてもその息吹は残る。

都心から車で1時間あまりの相模湖に面するホテル跡。心霊スポットにもなっていた廃墟の地下駐車場が、若いアーティストたちのアトリエになっている。三重県出身で役者を目指して上京していた磯和武明さん(31)は、4年前に旧藤野町地区に移り住み、この



「ふじのアート・ヴィレッジ」で毎月開催されるマーケットの参加者

アトリエで布製品や木工品を作る。「一目惚れした。地域には若い芸術家を受け入れる雰囲気もある」。ガラス工芸品を作る田村悠さん(30)は、東京・品川から通う。「飲み会をやるところを言えばバンドの演奏が始まり、インジシの肉が出てくる。良質な人やモノが集まっている」。

アトリエは社団法人「藤野エリアマネジメント」が運営し、車2台分の区画を月1万5千円で貸している。旧藤野町職員で社団法人代表理事の中村賢一さん(65)によると、これまで陶芸家や画家、音楽家など約350人のアーティストが移住してきたという。



ホテル跡の廃墟を改造したアトリエ「カンビルズ」で布製品をつくる磯和武明さん(左)11月に旧藤野町に拠点を構えたイラストレーター(右)の松村せい子さん



発端は神奈川県庁の主導で1986年に「ふるさと芸術村構想」を打ち出したことだという。当初は観光客の呼び込みを狙って野外アートの作品などが作られたが、次第に関連予算は減った。代わりに町は若いアーティストに空き家のあるアトリエを始めたという。

2007年に相模原市に編入合併。現在は若手アーティストらがギャラリーを構える「ふじのアート・ヴィレッジ」や、「芸術としての教育」を掲げる私立学校のシュタイナー学園など、民間の活動が地域の中核になった。町の企画課長

として合併にも携わった村さんは「合併で失ったものは大きいけれど、市民の自立が得られた」と話す。同じようにアーティストが移住し、IT企業も進出していること有名な徳島県神山町と対比して、「西の神山、東の藤野」と称されることもある。移住希望者にあっせんする空き家も

地域に作家共に刺激

国内外のアーティストを招いて滞在中に作品を制作してもらおう「アーティスト・イン・レジデンス」。国際交流基金が運営するサイトには現在、60件近いプログラムが登録されている。同基金でプログラム・コーディネーターを務めた菅野幸子さんによると、ヨーロッパの事例を参考に90年代から各地の自治体を取り組み始め、秋吉合国際芸術村(山口県美祿市)や国際芸術センター青森(青森市)などがつくられた。アーティストのステップアップに不可欠な存在になりつつあるという。

廃校になった小学校を改装した体験型宿泊施設、旧村役場庁舎を改修したアトリエ、50年の歴史がある民宿……。基金のサイトには趣向を凝らしたプログラムが登録されている。徳島県神山町では地域に来てほしいアーティストを住民たちが選んでおり、「地域に来てほしい企業や移住者まで呼び込むモデルを作り出した」と菅野さん。

一方、自治体や企業など支援する側が予算を削減すると影響を受けやすいという課題も。芸術・文化振興に詳しい公益社団法人企業メセナ協議会(東京)の澤田澄子事務局長は「大切なのは地域住民の共感を得ていくこと。そのためにはアーティストと社会を結びつける人材が重要」と話す。最近では、地域の芸術文化の継承や人材育成の重要性が目向けられている。「地域活性化のための一過性の取り組みにせず、地域の底力を発揮して活動を発展させていってほしい」。

(山下剛)